

ここは俺の部屋の俺の布団。
そこに一人、漫画を読みながら
のんきにくつろいでいる少女が
居る訳なんだが……

「ねー、お兄ちゃん見て見て。
ここ、すっごくおかしいよ」

「ん？ああ……そうか」

俺には妹はいないし、いまだ独身だ。
もちろん、犯罪に手を染めたわけでもない。

「…コトハ。マンガ読むのは自分の家でもできるんじゃないか？」

「えー…だって、家に誰もいなくてつまらないんだもん」

「そうか…。お父さん達は仕事行ってるんだよな」

俺は体を壊して会社を辞め、田舎にある実家へ帰っている。そしてこの子は、俺の兄貴の子供。つまり俺の姪っ子にあたる。



俺が就職をして、上京したときは
生まれたばかりだったのに、
いつの間にかこんなに大きくなって
いたのか。

兄貴の嫁に似て、
とても可愛い顔をしている。

俺はこの年になってもまだ童貞で、
しかも特殊な性癖を持っている。
そんな俺には、コトハはかなり
ストライクなわけ。

「お兄ちゃんは何見てるの？」

「…俺？…適当にネットサーフィンを…」

こんな感じでお兄ちゃんと呼んで
何か俺のような奴にこうやって
懐いてくるのだ。

お兄ちゃんキラーも
良いところである。

田舎の女の子は、
みんなこうなのだろうか？
いろんな意味で危険だ。

ここは実家といえど離れの家で、
俺とコトハしか居ない。

俺の布団にこうして寝そべって
いるだけで、
今にも襲い掛かりたい衝動に
駆られていて――



「って、イカンイカン!」
「?」

俺はこういう趣味をもってはいませんが、
さすがに実行に移すのはイケナイ事
だと自覚している。

それにこんなに俺に抵抗を持って
できないような純粋な子にそんな事
できる訳がないじゃないか。



これ以上一緒に居たら、
俺の気がどうにかなりそうだ。

ここはもったいないが、帰ってもらおう。

「…俺は忙しいから、
そろそろ家に帰りなさい」

「えー…でも…」

悲しそうな表情を浮かべて、本当に残念そうにしている。
本当は俺もこんな事言いたくないよ。



「…お兄ちゃんは病気なんだよね？」

「ああ…」

見た目はこの通り元気に見えているから、コトハにはあんまり俺が病人だっという事は理解していないようだった。

しかし兄貴が上手く説明したようだ。

病気と言っても心の病。普通に他人には分からないものである。



「お兄ちゃんが元気になるように、
こうやって一緒に居ちゃだめ？」

「…うっ」

純粋な眼差しが俺の胸に突き刺さる。
どうしてこう清いのだろうか。

「…トハが居ると、おじさんは困るんだよ」

「ぎゅっって？」



「うーん……なんというか……」

説明しにくい。
正直に欲情して手を出してしまう
からというわけにはいかないし……

「……とにかく、あんまり知らない人の
家に不用意に行っちゃダメなんだ。
……もし俺が危ない人だったら
どうするんだ？」

「お兄ちゃん知らない人じゃないよ？
それに、お兄ちゃんになら
何されても平気だもん」

「えっ……」



大胆な事をさらりと言っ子だ。

こんな事言われたら
我慢できなくなるじゃないか！

「…だから、一緒に居ちゃダメ？」

「う…」

「ま…まあ、おとなしくしてるならいいけど…」



「うん、おとなしくしてる」

にっこり笑いながらそう言っていると、コトハは少し鼻歌交じりに漫画の続きを読んでいた。

「.....」

それから俺は、パソコンを見ながら、時折、コトハの様子を伺うのであった。

性的な行為に走らないよう、神経をすり減らしながら。



そしてその日から俺は、
何日も悶々とした日々を送ることになる。

コトハが帰った後は、そのぬくもりの残った布団の上で
コトハを思い出してオナニーする日々が続いていた。

俺はどちらかといえば人から距離を置くような性格で、
他人からは近寄りがたい存在だ。

でもコトハは本当に俺に対して警戒心が無い。

俺があえてそっけない態度を取っても、
一生懸命俺に話しかけてくる。

正直こんな子は初めてで、
いつの間にか俺の頭は
コトハの事でいっぱいになっていた。

数日後のお昼過ぎ。
飲み物を買に出かけていた俺は
家に帰ってくると…。
かけていた俺は

「すう…すう…」

「…コトハか」

居間の方で寝息を立てているコトハの姿があった。
この頃は毎日のように来ていたが、
こんなところに居るなんて珍しい。

多分来たは良いが、俺が居ないと思って、
ここで宿題しながら待っていたんだろか。

今は夏休み期間。
宿題もタツプリと出されたようで、俺の部屋で
ちよくちよく宿題をしていた。
たまに俺が教えてあげることにもあったりした。

「…今日は国語の宿題か」

コトハの手元にあるノートを見て、そうつぶやく。
俺は夏休みの宿題なんて、終わり間際にしかやらないのに。
感心な子だ。

「すう…すう…」
「…っ」

そして今になって、コトハの様子に気づく。
もち肌のような太腿の上から覗かせている白い物体…。
そう、パンツが見えていたのである。

「……………」

無防備すぎるコトハ。これまでも何度かパンツが見えたことはあった。
その時はすぐ視線を外すようにしていたのだが…。



「…ゴクッ」

俺は思わず生唾を呑む。
コトハは今寝ている。
今なら触っても……

それに、この家には他に誰も居ない。

コトハがしょっちゅう家に来るようになってからというもの、
俺はずっとコトハを襲いたい欲求を抑えていたのだが、いよいよそれも
限界に来ていた。
理性が働くより先に、俺の手は思わずコトハの体に伸びていた。



さわ…。俺はコトハの太腿にそっと手を触れる。

「すう…すう…」

「…起きないみたいだな」

さわ…

精
精
精
米

コトハが目を覚まさないのを確認してから、俺は気づかれない程度にゆっくりとコトハの体を触っていく。

柔らかい：それでいて傷一つない、すべすべな肌。
自分のとはまるで違う。女の子の肌って、こんな凄いんだな。

そして一通り太腿を堪能した後。
俺の視線は当然パンツに向けられていた。

「ゴクッ…」

特にデザインに凝っているわけでもない、シンプルな白い布。
しかし俺にはその布がとても神々しく見えた。



俺は吸い込まれるようにスカートの中に手を入れ、
パンツの上から、そっとコトハのお尻を触る。

「おお……」

太腿とはまた違う感触だ。弾力があってそれでいて柔らかく……。
とにかく言葉では表現しづらい。



「……………」

次いでパンツの上からそつと匂いを嗅ぐ。
コトハが俺の部屋に来た時の残り香と、わずかに汗やおしっこの香りがする。

女の子らしい、甘酸っぱい香り…
これは堪らなく癖になりそうだ。

「…はあ…俺は最低だな…」

そう言いつつも、既に俺の興奮は限界に達していた。
当然息子も今までにない位、パンパンに膨れ上がっている。



「…」

こうなったらもう止まらない。
俺はコトハに気づかれないうちにスカートをめくり、パンツに手をかけ
ゆっくりとパンツをずらした。

「おお…」

思わず舐め回したくなるような柔肌のお尻があらわになり、
俺は思わず声を漏らす。
これが…女の子の…コトハのお尻か…。



そのままそっとお尻を直に触る。
パンツの上とはまた違う肌触りだ。ハリがあつて柔らかい。
こんな感触がこの世に存在するとは…。

そしてワレメの方を覗き込む。仰向けにすることはできないのが残念だが、
ここからでもしっかりと拝むことができる。

毛も生えていないツルツルのオマンコ。
当然そこは硬く閉じられていて、綺麗に一本の筋ができています。

いつかここに俺のオチンチンを入れてみたい…。それが今の俺の夢だ。
せめて指だけでも…と思つたが、ここは女の子の感じる部分だ。
さすがに触ったら起きてしまうだろう。



「すう…すう…」

コトハはまだ起きる様子がない。
今度はお尻のワレメに目が行った。

さっき触った感触はとても気持ち良くて…
ここにペニスを挟んだらさぞ気持ち良いだろうな。

「はあ…はあ…」

そう思い始めたら、今まで抑えていた感情が一気に爆発した。
俺はズボンに手をかけ、ズボンとパンツをおろし、いきり立った息子を取り出した。



「…たとえ起きてても、もう構うもんか」

これまではいいお兄ちゃんを演じてきたが、もうダメだ。
元々俺はこういう変態で最低の人間だ。
俺は、お尻のワレメの間にオチンチンを挟んだ。

「くっ…」

その瞬間、目の前に快樂が拡がった。
決して大きくはない二つのお肉が、ペニス全体を温かく包み込んで離さない。



ペニスは当然、ピクピクと嬉しそうに震えている。
こうしているだけでも暴発してしまいそうだ。

「すう…すう…」

ここまでしても、コトハは一向に起きる気配がない。
何て寝つきの良い子なんだ。
行為を全てしてしまっても起きないんじゃないかってくらい、深い寝息をたてている。



「…少し位なら…動かしても問題ないよな」

俺は優しくお尻をつかみ、ゆっくりとその割れ目の間でペニスを前後させる。



包み込んで離さなかったお肉が、ペニスを動かすたびに摩擦を生む。そこから生まれる快楽は相当なもので、俺は感動と快楽に酔いしれていた。

「くっ…コトハ…。俺は…っ…こんな悪い大人なんだぞ…」

寝ているコトハに、起きない程度にそっと話しかける。

「コトハはイケナイ子だな…こんな危ない人の前で無防備になるなんて。気を付けないといけないぞ…」

そうだ。いま俺は、コトハを犯しているんだ。自分のこの言葉が俺の性欲をさらに掻き立て、興奮はますます高まっていた。



いつの間にかペニスからは我慢汁が溢れだし、摩擦は滑らかなものに変わっていた。そしてクチュユ！クチュユ！といやらしい音が漏れだす。

「ん……」

「……っ！」

やばい……起きたか……！？



「すう…すう…お兄ちゃん…」

思わず動きを止めて、コトハを観察するが、再び寝息を立てていた。どうやら寝言のようだ。

しかし、お兄ちゃんか…夢の中に俺でも出てきているのだろうか。コトハの中の俺は、どんな感じなんだろう。

「ごめんな…コトハ…現実はこのお兄ちゃんなんだ」



少し罪悪感を覚えながら、再び尻コキを再開する。
気づけばコトハのお尻はかなり汗ばんでいる。

ここは標高が高く、比較的涼しいとはいえ、真夏の時期だ。
しかも居間には扇風機しかない。
さすがに少し熱いかもしれない。



「はあ…はあ…」

我慢汁にコトハの汗も交わり、感度が更に増していく。

「くっ…もう…限界だ…射精しそうだ…」

気づけば射精感がそこまでこみ上げてきている。
このまま発射したいのはやまやまだが、さすがに服にかかってしまえば
いい訳ができない。
俺はゆっくりとペニスを引き抜き――



「くっ！」

服にかからないよう、お尻と太もも目がけて発射した。

「はあ…はあ…」

今までにないくらいの興奮度で、射精の量もいつもより多かった。正直勢いが良すぎてスカートにかかってしまうんじゃないかとひやひやしてしまっただ。

ひゅるる♡



「すう…すう…」

一方のコトハは、まだ寝息を立てている。

「…」めんな。コトハ」

今まで溜めこんでいた欲望を一気にぶちまけた後、俺は急に罪悪感に苛まれた。



『……………』

俺はティッシュでそっとコトハについた精液をふき取り、
パンツを穿かせ、
タオルケットをかけてそのままそっと夕方まで寝かせた。

その日の俺が、コトハの顔をあまり直視できなかつたのは
言うまでもない。